

ナタンズ爆撃作戦の任務を終えたイスラエル空軍の3機の戦闘機は追手を振り切ってイランの領空外に抜け出した。

しかしそこで待ち受けていたのは進路を南にとりペルシヤ湾上空をホルムズ海峡に向かえ、という指令であった。程なく司令部から、給油機がサウジアラビア領内で撃墜された、との驚愕すべき情報もたらされた。当初の作戦では往路と同じルートでイスラエルに帰還する途中に空中給油機が出迎え、燃料を補給して基地に戻るようになっていた。親鳥が三羽の小鳥の労をねぎらい餌を腹いっぱいを与え、そして全員で意気揚々と基地に舞い戻る予定だったのである。

その親鳥の出迎えがないまま3機は当てもなくペルシヤ湾上空を南下した。残された燃料はあと1時間程度しかなく、ホルムズ海峡を越えることもできないことは確かだ。このままではペルシヤ湾に不時着する他なく、墜落前にパラシュートで脱出したとしても、誰が彼らを拾い上げてくれるのだろうか。左岸はさきほど空爆したばかりのイラン、右岸はサウジアラビア、バハレーン、カタール、アラブ首長国連邦などイスラエルの仇敵のアラブ諸国である。イランの巡視船或いは漁船に助けられたなら目も当てられない。かと言ってアラブ諸国の哨戒艇か漁船に助けられたとしても晒し者に第8章 されることは間違いない。いずれにしてもパイロット達にとっては勝利の凱旋どころ

ではなさそうだ。

不安に駆られたパイロット達の反応は三者三様であった。『エリート』は内心の動揺を抑えリーダーとして冷静沈着さを装った。彼は僚機の『マフィア』と『アブダラー』に落ち着くように諭し、指令部が何らかの救出作戦を講じるに違いない、と元気づけた。確信があった訳ではない。しかしこれまでもイスラエル軍はどのような困難な状況でも決して仲間を見殺しにすることはなかった。司令部は必ずや自分たちを救出してくれるはずだと『エリート』は信じたかった。

彼の根拠の一つ。それは米軍がペルシャ湾内に展開していることであった。バハレーンには第五艦隊が配備されており、またカタールのウデイドには米中央軍の前線司令部があった。さらに湾内のホルムズ海峡近くには現在原子力空母「ハリー・S・トルーマン」が遊弋しているはずである。

△作戦本部は米軍を動かして自分たちを救出してくれる。親父がそれに一枚噛むに違いない。▽

『エリート』と僚機の3機は雲一つない紺碧の空と穏やかなエメラルドグリーン

『マフィア』は饒舌であった。先の見えない不安感を忘れるために彼はひたすら喋りまくった。生まれ故郷ウクライナでの抑圧され貧しかった農村時代。ソビエト連邦の崩壊をきっかけに新天地を求めてイスラエルに移住した一家。移住先で与えられた荒野の開拓地での父母の奮闘。一族の期待を背に空軍に入隊し優秀なパイロットとして頭角を現した事。今回任務を完遂したことで無事帰港すれば名誉の勲章と昇格が待ち受けているに違いないこと等々……

マフィアは最後の「無事帰港すれば……」と言うと急に黙りこくってしまった。

『アブダラー』は二人とは対照的に終始寡黙であった。イラン領空を脱した直後から体に不調を感じ始めていたのである。2週間ばかり前、高熱を出し入院していた姪を見舞いに姉の嫁ぎ先近くの病院を訪れた。しかしその後、彼自身も微熱を出した。幸い寝込むほどのことはなかったが、今回のナタンズ爆撃のパイロットに選ばれていたためそのことは仲間に伏せていた。もし体の不調を訴えればメンバーからはずされたに違いない。彼は何としても3人のパイロットの一人に選ばれた名誉を失いたくなかった。

アラブのミズラフイム出身である『アブダラー』は『エリート』のようなアシケナジム出身者たちとは陰に陽に差別されてきた。そのため友人の中にはハマスのような過激組織に身を投じる者も少なくなかったが、彼自身はイスラエル国民として生きる道を選んだ。「人は国家を選べない以上、国家とともに生きる。」それが彼の信条で

あつた。そして軍隊に志願し忠実に義務を果たした結果、今回国家的使命を帯びたパイロットの一人に選ばれた。そのため何としても今回の任務をやり遂げたかったのである。

彼はまだ独身である。両親は既に亡くなっている。彼の身内は姉とその娘のルルの3人だけである。それだけに彼と姉との結びつきは強い。そして姪のルルは彼によくなついていた。

そんなルルが数週間前に高熱を出し、「叔父ちゃん！叔父ちゃん！」とうわ言を言っている。姉が伝えてきた。彼はその週末に急いで病院に駆け付けた。幸いにも熱は引いており、ベッドに起き上がった姪に彼は絵本を読み聞かせてやった。姪は彼の腕を抱え込みうれしそうに聞き入っていた。付き添いの姉が「ルル！そんなにくっ付いちゃ叔父さんに風邪が移っちゃうよ。」と注意したが彼女は抱え込んだ腕を離そうとしなかった。

コックピットの『アブダラー』はヘルメットを脱ぐと首にぶら下げたロケットを戦闘服の襟もとから取り出し蓋を開けた。そこには彼の唯一の肉親である姉と姪の写真が入っている。△週末にはまた姪に会いに行こう▽ 心の中で呟くと彼はいとおしむように写真を眺めた。

その時、喉の奥につかえを覚え、咳き込みそうになった。

△風邪は治ったはずなのに……

▽

彼は数度咳き込んだ。それはまるで彼の意味とは無関係に体の中の何者かに駆り立てられたようであった。咳とともに喉の奥の痰が姉と姪の写真に飛び散った。『アブダラー』はそのままロケットの蓋を閉じ胸にしまい込むと、ヘルメットを装着し直した。

「どうしたんだ？」

『エリート』の心配そうな問いかけが入った。膝に置いたヘルメットのマイクロフォンが咳こむ音を拾ったらしい。

「何でもありません。任務が終わって緊張が解けたためと思われませぬ。」

実のところ緊張が解けた訳ではなかった。彼にはなお気がかりなことが一つあった。操縦する戦闘機の胴体下部に残っている小型核ミサイル。彼は心の中でつぶやいた。

△これだけは無事に基地にもちかえらなければ▽

しかしペルシャ湾上空をさまよう戦闘機はイスラエルからますます遠ざかるばかりである。彼は前方に広がるペルシャ湾の紺碧の海と真青な空をただじつと凝視した。